

岡部昌生フロッタージュプロジェクト 2014 札幌ラウンドテーブル

# 札幌で語る〈近代〉 講師：港千尋 管啓次郎 岡部昌生

ゲスト：佐藤友哉 札幌芸術の森美術館長 寄稿：上木和正 元夕張市美術館長

9月13日(土)13:30-16:30 | 札幌市資料館 札幌市中央区大通西 13 丁目 | 参加無料 申込み不要 定員 80 名



## 場所が覚えているものを 岡部昌生の仕事

管 啓次郎

土地に生きてきた、場所に生きてきた。それがヒトの暮らしだった。土地に生かされてきた、場所に支えられてきた。他のすべての動物種とともに。すべての植物種によって与えられ、すべての面類に全面的に依存しながら。ずっとそうやって、ほそぼそと社会を営んできた。そしてヒトの営みを、土地が記憶した、場所が記憶した。地表にはすべてが刻まれ、残っている。美しさも愚かさも、あきらめも抵抗も、建設も、破壊も。生きてきた者たちの、消えていった者たちの、すべての線の痕跡が。

〈土地〉とは物質世界の全面的なひろがりだ。そこに生命の数々の糸が住みこんでいる。〈場所〉とは人の認識が見出し、人の体が働きかけて、意味を刻んだ地点のことだ。私たちの生涯は、遠近の数々の場所をつなぎ往還することで編まれてゆく。場所と人の生の関係は一種の相互的な擦過傷のようなものだ。場所は人々によってこすられ、できあがり、人は場所たちによってこすられ、できあがる。できあがるといってもそこに完成はない。すべてはあるとき、時の切断面に、そこに現れている紋様にすぎない。しかしそれは、そのつど全面的なひろがり。岡部昌生が相手となるのは、そのひろがりだ。紙をひろげ、岡部さんは、場所の表面に密着する。密着という行為そのものを

さらに掘り下げるかのように、彼は力をこめて手を動かす。すべての痕跡を擦り取るために。場所の記憶は物質の表面として、そこにある、つねにある。全面的に表れている。だがそれを人はよく感じることができない。知ることができない。自分の体の動きによって記憶を浮遊状態に戻してやる必要があるのだ。擦れ、ほら、浮いた。写し取られた紋様が、記憶を再生する。何よりもまなましく、何よりも事実近くに。

「地表」という言葉の意味をいいたい私たちは知っているのだろうかと思う。言葉として知っているつもりで、その内実をはたして本当に見ているのだろうかと思う。岡部さんは違う。彼の手が、彼の全身が、地表を全面的に体験しようとしている。記憶しようとしている。記憶を再生させようとしている。それを伝えようとしている。彼が擦り取った地表のすべての痕跡を、その場所から改めて浮き上がった記憶を、ほくらはどうしようか。彼の手を経たすべての紙の集積、そのひろがりこそ、明日の私たちの社会のためのもつとも確実な基礎があるのだと、いまは断言していいように思う。なぜなら岡部昌生が移したのは、その場所が生きてきた唯一の歴史そのものだからだ。

## 大地をむすぶために

港 千尋

わたしたちの感星ではいま、いたるところに裂け目が広がっている。大地に亀裂がはいり、天には異常がつづき、海洋に起こる変化は予測ができない。自然環境の激変は人間の活動と複雑に絡みあい、互いに影響を及ぼしている。福島第一原子力発電所によって引き起こされた放射能の拡散はすでに地球規模の汚染となったが、収束の見通しすらたないまま、政府はその原発依存の政治を変えようとはしない。いっさい地球の裂け目は人間の精神にも異常をもたらしているのだろうか。亀裂をさらに拡大するような政治とは、まさに裂け目を利用して自らの延命をはかる政治にほかならない。

だが危機は創造の根源でもある。大地の割れ目からは火がのぞき、岩のひび割れからは伏流水が湧き出す。その場所の間は、水を掬ふ。それは水に

よって根源の力を身体へ通す行為である。地の結び目を見守るムスピノカミに、「産び」の字を当てた人々は創造とは何かを知っていたにちがいない。大地に潜在する見えない破線を読みとり、それをイメージにむすびつける想像力が、モノを産みだすからだ。

わたしたちはこれまで岡部昌生とともに、地球のさまざまな場所で地面に触れてきた。土、石、岩、壁、水、樹…それらの表面にある裂け目やヒビを感じとり、一枚の紙に写し取る行為をつうじて、大地とのあいだに交感が生まれる。遠い過去をたぐりよせ、離れた場所を目の前にならべる。紙のうえで大地をむすび、その周りに言葉を呼び寄せ。福島から札幌へ、札幌から世界へ—土地と土地をむすび、創造の鍵を共有するための場所が、いまここにひらかれる。

主催：はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会  
札幌で語る〈近代〉実行委員会



事業問合せ：はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト実行委員会事務局 〒965-0807 福島県会津若松市城東町 1-25(福島県立博物館内) fax.0242-28-5986  
会場等お問合せ：札幌で語る〈近代〉実行委員会(小室治夫 Tel.fax.011- 622- 5788 E-mail : hksynsys@gmail.com)

お知らせ

札幌国際芸術祭 2014 企画展示「都市と自然」関連トーク

## 「都市と自然」の背後にある「近代」とは？

登壇者：岡部昌生 島山直哉 聞き手：港千尋 司会：飯田志保子

9月6日(土)14:00-16:00 北海道立近代美術館講堂 無料 主催：創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会



# 北海道・福島 周縁の近代



# 札幌から世界へ、福島へ



# 歴史を擦る—おらほの碑



管 啓次郎(すがけいじろう)

1958年生まれ。明治大学大学院理工学研究所 デジタルコンテンツ系教授。詩人・比較文学者。2011年『斜線の旅』で第62回読売文学賞・随筆・紀行賞を受賞。多言語、多文化の世界観を探究。東日本大震災後、小説家・古川日出男らと朗読劇「銀河鉄道之夜」の公演を続けている。

港 千尋(みなとちひろ)

1960年生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科教授。写真と評論の両面から世界中を駆け巡り記憶とイメージをテーマに、映像人類学など幅広い活動を続けている。国際展のキュレーションも行い、2007年には、岡部昌生が参加した第52回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナーを務めた。

岡部昌生(おかべまさお)

1942年生まれ。記憶や歴史の痕跡を写し取るため1977年よりプロッタージュ(擦り出し)という手法を用いて表現を始める。1980年代後半より広島市の原爆の痕跡を作品化するプロジェクトを開始し、2007年のベネチア・ビエンナーレにおいて結実化。その直接的かつ身体的な実践に対して世界的な評価を受けた。現在も継続的に国内外各都市で制作・展覧会活動を展開している。



- ① 太田秋之助報徳碑(南相馬市小高区北新田 2014年5月19日)
- ② 松永三衛翁之碑(大熊町熊川 2014年5月28日)
- ③ 漂着したテトラポットに付着したフジツボの死骸(南相馬市小高区井田川 2013年3月22日)
- ④ 津波で移動した防波堤の切断面(浪江町鎌戸 2013年7月11日)
- ⑤ 文学環境学会ラウンドテーブル(南相馬市博物館 2013年9月2日)
- ⑥ おらほの碑 - 南相馬の記憶と記録 展(南相馬市博物館 2013年4月2日~5月6日)
- ⑦ 比曽の十三佛(飯館村比曽愛宕神社 2014年5月24日)
- ⑧ ヒロシマで語るフクシマラウンドテーブル(広島市旧日願広島支店 2013年10月12日)
- ⑨ 登神碑(飯館村飯盛大雷神社 2014年5月24日)
- ⑩ 津波で刻まれた擦過痕のある土間の遺構(南相馬市小高区井田川北新田 2014年5月25日)
- ⑪ 津波で倒壊した防波堤(大熊町熊川海水浴場 2014年5月28日)